

「伝統」と「近代」を超える女性の実践

——ジェンダーの視座から——

代表者・司会 小林奈央子

コメンテータ 黒木 雅子

「良妻賢母」の登場

——ポスト社会主義のロシア正教会の女性像——

井 上 まどか

本報告では、ソ連崩壊から約二〇年を経る今日のロシア連邦において、教育・医療・福祉分野など公共領域で存在感を増すロシア正教会の提示する女性像・家族像について分析を行う。

おもな分析対象は、ロシア正教会の女性信徒を読者対象とした正教会暦（『女性の正教会暦二〇一〇年版』（モスクワ））にみられるロマノフ王朝最後の皇后アレクサンドラ（一八七二—一九一八）のノートおよび男性聖職者たちの発言である。すでに指摘されているように、女性にとっての宗教は、家父長制が女性支配のために用いる「主人の道具」を意味するとされてきた。今日のロシア正教会の提示する女性像・家族像もまた保守的なジェンダー規範を提供するようにみえる。ただ、分析を通じて明らかにするのは、分析対象とする諸言説が一枚岩のメッセージを発しているわけではなく、相互に対立することもあるメッセージを多声的に響かせており、読者にとって新しくもある

り、また「伝統」的でもある女性像・家族像を提示しているという点である。

本報告の資料にみられる女性像・家族像は、（一）夫と妻の平等性を強調するアレクサンドラ皇后の夫婦像と、エフェソの信徒への手紙（五章二二—二四節）などを引用して夫婦間ヒエラルキーを強調する男性聖職者たちの夫婦像、（二）ジェンダー間の不均衡を感じさせぬような注意深さを備えつつ「忠実さ（vernost）」に妻の美徳をみるアレクサンドラ皇后と、家庭内で夫に従うべき「第二位」の立場にある妻の「従順さ（poslušanie）」を要求する男性聖職者たち、（三）両親と子どもからなる「完全なる」家族像を提示するアレクサンドラ皇后と、両親と子どもとの間にヒエラルキーを認めつつ、現代ロシアの多様な家族形態と向き合う男性聖職者たち（例——母子家庭で育児に困難さを感じる信徒の質問への回答）というように、夫婦像・家族像をめぐるメッセージは一枚岩のものではない。

アレクサンドラ皇后の描く「良妻賢母」像は、ソ連時代よりほぼ一貫して離婚率が高く、ソ連崩壊以降、失業および再就職困難な女性たちが増加する今日状況においては、多くの女性たちにとって現実的な選択肢とはいえないようにみえる。同時に、ソ連崩壊後の教育改革によって、国家による包括的人格教育から子どもと親の選択の幅拡大という変化を経た今日においては、育児にかかわる親の責任が増しており、子どもの非行や道徳心の低下が女性の社会進出に帰せられる傾向も見いだされる。こうした状況においては、アレクサンドラ皇后の夫婦像・家族像は、夫婦間の平等性に立脚しつつも、男性聖職者たちの

強調する「従順さ」や夫婦間ヒエラルキーに回収されてしまいかねない。つまりアレクサンドラ皇后の言説は、平等性と従順性という相矛盾する両側面を備えたものとして響くことになる。ただ他方で、アレクサンドラ皇后の夫婦像・家族像——平等性を基盤として夫が外で働き、妻が家事全般に責任をもち、互いにケアしあう夫婦・両親と子どものそろうた家族——はソ連時代および崩壊後の今日のロシアにおいて、多くの女性が経験したことのないものであり、新しい像であるともいえる。さらに、本報告の資料に見いだされる「アレクサンドラ・フォードロヴナ皇后」は、従来の皇后像から、家族を大切にする正教会の諸知識に通じた皇后像への転換を示しており、これは皇后を含めたニコライ二世一家が聖人として列聖された後にみられる傾向の一端を示しているといえよう。

一九九〇年代にロシア国内で盛んに論じられた「精神の真空」状態や道徳心の低下をめぐる議論は、宗教文化・世俗倫理教育の試験的導入をもたらすと同時に、あらたな女性像・家族像の模索をもたらした。本報告で扱った資料は、互いに異なる夫婦像・家族像を提示しており、現代のそのような模索状況を反映している。

近代医療のなかで上座仏教をいきる

——中国タイ族女性の出産から——

磯部 美里

出産とは、生物学的行為であるとともに、家族、社会、国家といった他者との関わりの中で成立する文化的事象である。そのため、宗教は出産に関わる社会規範や知識体系と密接に結びついている。これまで、ジェンダーの視点から、宗教の男性中心主義的性質が指摘されてきたが、出産においてはいかなる状況がみられるのだろうか。

本発表では上記の問いをもとに、中国雲南省西双版纳タイ族自治州に居住するタイ族を事例として、伝統的な出産の様相および近代医療的に基づく出産方法の普及によるその変化について検討する。その際、産む行為においては「主体」となりながら、産む方法においては周縁に置かれる女性の「伝統」と「近代」のはざまにみられる実践に注目する。

タイ族は中国国内に約百十五万人を数え、雲南省を中心に居住する民族である。本発表で取り上げる西双版纳タイ族は、上座仏教を厚く信仰してきた。男児が十歳頃出家し寺で文字や経典、教養を学んだ後二十歳頃に還俗するのに対し、女兒は出家できない。そのため、男性は知識保有者として村の役職や儀礼時の重要な役割を担っている。

タイ族の伝統的な出産方法についていえば、自宅出産では夫や両親といった家族や親戚が立ち会うなか出産を行ってきた。